ある殿様の足跡

久保田暁一

私が行っている大溝教会の礼拝堂には、大溝教会と縁の深い、召天されたキリスト者の額縁入りの写真が三十葉ばかり掲げられている。そして最初に掲げられている写真は、大溝藩の最後の殿様であった分部光謙公のもので、紋付きの和服姿、頭のはげ上がった晩年の写真である。そして、その写真の姿から感じられるのは、幾多の苦しみを経ながらも、純な魂の世界に辿りついた人が持つ、幾分愁いを含んだ温容な風情である。私は教会に行く度に、いつも光謙公に見つめられているように感じ、何時かは光謙公の生涯を小説として書きたいと思っている。

調べてみると、光謙公は一八六二年（文久二年）十一月三日、大溝藩主の父光貞と母孝子の間に生まれている。そして明治三年八歳の時、父の逝去によって分部家を継ぎ大溝藩知事に任じられている。が、明治維新の改革によって藩知事職を返上して上京し、学習院で学んだ。そして学業成績が良く、剣術と馬術にも秀で、堂々たる体躯とも相まって将来の大器と期待された。しかし、世間を知らない貴公子の光謙公は、鹿鳴館を中心とする派

手な社交界への出入りによる華美な生活と競馬・賭博に身を持ち崩し、経済生活の破綻に追い込まれ、借金を重ねた。そして金銭上のもつれから訴えられて謹慎生活を送るに至った。

しかし、その挫折が光謙公の人生観と生き方を変え、それまで物欲的な名利の世界に溺れてきた自分を悔い改め、純一な魂の世界へと導かれるに至った。世俗の苦しみと挫折に遭遇したことが、光謙公をキリスト教へと導き、霊性を目覚めさせるに至ったのである。

光謙公が大溝の地に帰郷されたのは一九〇八年（明治四十一年）四十七歳の時である。そして、一九四四（昭和十九）八十三歳で召天するまで、伝道に身を捧げたのである。